

# 空き缶と炭でせんべい状の作品を焼く

—— 焼き割れしない粘土の調整と素朴な野焼き ——



## 表現内容の要素と発想の視点

- ・表現材料：水簸／木節粘土、砂／シャモット
- ・造形要素（色、形、材質）：せんべい状の不定形、凹凸模様の材質（感）
- ・表現技法：板づくり、型押し、空き缶野焼き、炭化焼成、焼き割れ防止粘土の調整
- ・表現様式：抽象／具象形
- ・表現対象／主題：表現者が思考、追究、決定する

写真1「空き缶による野焼き」の情景

## 造形発想、表現と焼成方法について

焼き物は焼成方法の違いで焼き上がりの雰囲気が一変する。ガス窯や電気窯など、近代的な窯で焼成するのとは一味違った方法に野焼きがある。

野焼きは薪などを燃料にした原始的な焼成方法であるが、縄文土器に見られるよう素朴な焼き上がりが魅力的である。

野焼きは原始的な焼成方法であるだけに、手間と焼成の技術が必要になる。焼成温度の調節が難しいと同時に作品に直接炎があたるため、温度ムラが生じて焼き割れすることが多いのである。

しかし、焼き物の原点である野焼きの素朴で温かい雰囲気のある焼き上がりは捨てがたいものがある。

そこで、手間をかけず、簡易的な野焼きの方法として空き缶と炭を使った焼き物に挑戦してみることにする。

まず、温度の急熱、急冷による焼き割れを防ぐために粘土の調整をする。

作品も急熱に対して比較的、水蒸気が抜けやすいせんべい状、板状の小品を焼成することにする。

燃料に炭を使った、空き缶野焼きである。

## 用具／材料

制作：水簸／木節粘土（約300g）、山砂／シャモット（約90g）、どべ、粘土板、粘土べら（各種）、粘土切り針、布、筆、型押し用具（各種）、カップ、雑巾ほか

空き缶野焼き：18ℓ缶、1mm径針金（約2m）、薪として割り箸（2～30本）、新聞紙、炭（18ℓ缶に半分程度）、もみがら、レンガ2個、たがね、ポンチ、げんのう、バケツ、焼き物用つかみばさみ、軍手、ペンチ、金切りばさみ、着火用ガスライター、うちわ、その他

## 表現のプロセスと内容

### ●焼き割れを防ぐ粘土の調整のポイント

一般的に粒子が細かい粘土は、焼成時に内部に含まれている水分を水蒸気として外に放出するときの抵抗が大きく、焼き割れの大きな要因となる。野焼きによる急熱、急冷は、このリスクが非常に大きくなる。

つまり、野焼きによる急熱、急冷から焼き割れを防ぐための基本的なポイントは二つである。

- ・急熱による粘土内から出る水蒸気の逃げ道を確保する。
- ・急熱による粘土の収縮、膨張を少なくする。

### ●焼き割れを防ぐ粘土の調整の具体的な方法

急熱、急冷から焼き割れを防ぐための具体的な方法として、粘土に砂やシャモットをまぜ、粒子を粗くすることがある。粗い粘土粒子の間から水蒸気が抜けやすいと同時に、粘土の収縮、膨張も吸収しやすくなるのである。

粗い粘土は焼成による急熱、急冷から焼き割れを防ぐが、一方で粘土の可塑性は悪くなるリスクが伴うことを確認しておく。

- ・ここでは粒子が細かい水簸粘土、または木節粘土に対して重量比で30%程度の山砂

をまぜて粘土を調整した。(写真2)

《もともと粒子が粗いテラコッタ粘土を調整するときは、重量比で15%程度の砂を混ぜるとよい。》

- ・粘土を板状に延ばし、水に濡らした砂を包み込むように少しずつ練る。(写真3)
- 《粘土が固ければ、水で湿らせた雑巾に粘土をくるんでもみ、少しずつ水分を補っていくとよい。》(写真4)

### ●せんべい状の板粘土から、思いついたものをつくる

※せんべい状粘土板からの制作過程は「創作陶芸2」／「せんべい状に延ばした形を立てて！」を参照。ここでは上記以外の制作方法や例を幾つか示しておく。

- ・型押しをして凹凸模様をつける。おろし板、ペンなど、さまざまなものが見える。(写真5)
- ・その他の方法として、へらで線彫りすることもできる。
- ・縁を立体的に立ち上げた。(写真6)
- ・せんべい状の板を丸めた。(写真7)



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7

●空き缶の窯をつくる(缶の構造と焼成図参照)

- ・缶にたがねポンチなどで直径2cm程度の空気穴を図のように底面、側面にあける。《必要があれば、金切りばさみを使う。穴が大きく、また多いほど急熱焼成になり、焼成時間は短くなる。》(写真8)
- ・針金を巻いたものを缶底に置き、空気溝(ロストル)とする。
- ・レンガの上に缶を乗せる。

●作品を缶に詰め、焼成する

- ・グルグルに巻いた針金の上に着火用の新聞紙と割り箸を入れる。
- ・炭と作品を交互に詰める。空気や熱が対流するように、炭と作品をなるべく立て、間に十分な隙間をつくっておく。《炭の量が多いほど、高温焼成になる。温度ムラはあるが部分的には1000℃を超えることもある。》
- ・缶の一番下の穴からガスライターで新聞紙に火をつける。《ガスライターは先が長いものを使う。火がつきにくい場合は、作品と炭を詰めすぎ

ていて空気不足が考えられる。》

《焼成中はバケツに水を入れて備える。》

《焼成中は、缶が高温になっても色の変化が少ないので、錯覚して触って火傷をしないように安全に注意を払う。》(写真9)

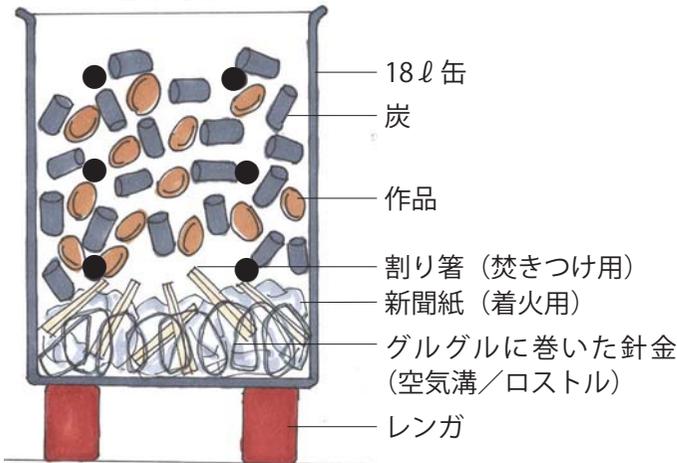
- ・炭が燃え尽きたら焼成完了とする。1日置いて温度が下がったら取り出す。すぐに取り出したい場合は焼き物用つかみばさみで作品を取り出す。(写真10)

《焼成時間は、詰める作品の量と空気穴の大きさ等によるが、約2~3時間である。》

●焼き上がった高温の作品を取り出し、籾殻の中に入れて炭化して黒い作品に仕上がる(写真11)

- ・籾殻や藁などの有機物の中に高温の作品を入れると焦げ目が黒く付く。作品の温度が低いと黒色はうすくなる。《焼き物用つかみばさみで作品を取り出すとき、火傷をしないように注意する。》

缶の構造と焼成図



- …空気穴 缶の4側面と底面にあける。  
※一番下の穴から、ガスライターで火をつける。

写真8



写真9



写真 10



写真 11



写真 12 焼き上がった作品を取り出す。

## 表現のバラエティ



写真 13 完成作品 へらの角で羽模様の凹凸をつけて。「みみずく」〔約 700～1000℃焼成／無釉〕(縦約 5 cm)

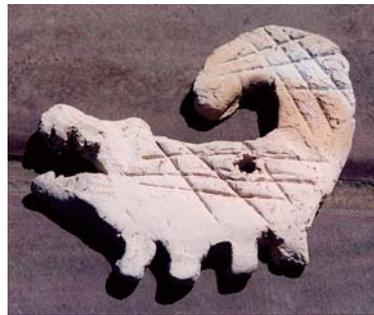


写真 14 完成作品 線の模様を彫る。「わに」〔約 700～900℃焼成／無釉〕(横約 7 cm)



写真 15 完成作品 型押しと目に小石を象嵌。「瓢箪ねこ」〔約 700～900℃焼成／無釉〕(縦約 7 cm)



写真 16 完成作品 細いへらでひげを彫る。「三角ねこ」〔約 700～800℃焼成／無釉〕(縦約 6 cm)



写真 17 完成作品 ペンで丸く型押し。「魚たち 1」〔約 700～1000℃焼成／無釉〕(縦約 7 cm)



写真 18 完成作品 へらで線模様を彫る。「魚たち 2 / かわいい」〔約 700～1000℃焼成／無釉〕(縦約 7 cm)



写真19 完成作品 線描きと型押し、真ん中をふくらませた。「魚たち3 / えい」〔約700～800℃焼成／炭化／無釉〕(縦約7cm)



写真20 完成作品 手跡と型押し。「魚たち4」〔約700～800℃焼成／炭化／無釉〕(横約7cm)



写真21 完成作品 靴底の型押し模様。「しま犬」〔約700～800℃焼成／炭化／無釉〕(横約7cm)



写真22 完成作品 ペンで丸く型押し、背中を丸めて立体的に。「かめ」〔約700～800℃焼成／炭化／無釉〕(縦約8cm)



写真23 完成作品 粘土板を丸めてリング状の立体に。「犬輪」〔約700～800℃焼成／炭化／無釉〕(縦約8cm)



写真24 完成作品 せんべい状の板を丸めて筒状の立体的に。「魚たち5」〔約700～800℃焼成／炭化／無釉〕(縦約8cm)



写真25 完成作品 せんべい状に伸ばした粘土を立てて。「あしのうら家族」〔約600～900℃焼成／無釉〕(高さ約5～8cm)



写真26 完成作品 せんべい状の板を丸めて筒状の立体的な猫をつくって。「みんなの猫、大集合」〔約700～1000℃焼成／一部炭化／無釉〕(高さ約7～10cm)

※ 野焼きにおける作品の焼成温度の表示は、あくまで著者の経験による判断であり、温度計等を使って測定したものではない。同じ作品の中でも部分的に焼成温度は違って、色や材質感の複雑な表情などにも表れている。それはまた、野焼きの特徴でもあり、面白さでもある。